甲殻類

1 選定・評価方法の概要

甲殻類は、1998 年版では対象とされておらず、今回、初めて対象となった分類群である。水中あるいは周辺湿地に生息する動物群で、顕微鏡サイズのミジンコ類から節足動物中最大のタカアシガニまで、大小も形態も生態も著しく変化に富んでいる。河川や湖沼、磯や干潟から深海まで多くの種が知られているが、エビ類、ヤドカリ類、カニ類 (十脚甲殻類) には水産資源として重要な種が含まれている。

今回、評価対象としたのは十脚甲殻類のみである。ミジンコ類など微小なプランクトンや湿地性のワラジムシ類なども水質や環境を知るためには重要な指標となること、また、生息環境が埋め立てや宅地化により失われつつあることは事実であるが、分布記録が少ないこと、肉眼での観察、種名の決定が困難であることなどの理由で評価対象から除外した。

十脚甲殻類は海水性、汽水性、純淡水性、半陸生性、両側回遊性に分けられる。今回は海産種以外を評価対象とし、汽水域で記録されている種については、主たる生息地がどこかということを考慮した。

東京都から記録されている汽水産、淡水産の十脚甲殻類は、エビ類 6 種、カニ類 12 種である。このうち、エビジャコは汽水域で相当数採集されたことがあるが (国土交通省「平成 13 年度河川水辺の国勢調査」)、本来の生息地は数〜十数メートルの海底であるので評価対象外とした。また、コブシガニは汽水域よりもむしろ遠浅の潟が、イソガニは岩礁がそれぞれ本来の生息地であるとして評価対象外とした。そのため、その他のエビ類 5 種、カニ類 10 種を検討対象種とした。

既存の生息記録が少ないことから、個体数や生息地の経年的増減を知ることができないため、定性的要件に基づいて評価を行った。

2 選定・評価結果の概要

検討対象種とした 15 種について、現在の生息環境と他県での生息状況などを考え合わせ、全ての種において問題のない個体数が維持されていると判断されたが、下記の理由により留意する必要があるため、留意種とした。

海と陸が隔てられた短い海岸線、大都会を流れている河川、宅地化が進む北多摩地域、南多摩地域、自然が残る西多摩地域と、東京都は明らかに異なる環境から成る。汽水域から淡水域まで遡上するクロベンケイガニ、多摩地域の渓流に生息するサワガニ、大型河川の中流域に生息するテナガエビなどの例を見るまでもなく、十脚甲殻類が東京都全域に分布することはなく、希少種や特定の環境を必要とする種はすでに淘汰され、比較的環境変化に強い種が生息しているのが現状であると判断される。結果として、現在生息している種の増減こそが、水域環境の直接的指標となると考えられることから、多くの種を留意種に指定した。また、2004 年に東京湾で採集されたチュウゴクモクズガニの増殖が危惧されることから、生態的に競合するモクズガニも留意種とした。

浮遊幼生が他海域から補給される海産甲殻類と比較して、淡水域や汽水域に生息する甲殻類は水質の状況に応じて個体数は増減し、あるいは宅地造成などによって生息地が失われて絶滅する。十脚甲殻類は水中生活であることから、採集や観察は容易ではないが、いずれも環境指標種として有用である。

なお、既刊の図鑑類では未だ見られないが、研究者間では、従来のスナガニ科をオサガニ科やコメツキガニ科など、イワガニ科をモクズガニ科やベンケイガニ科などに細分する傾向が強く、本書でも科名を最新の研究結果に従って表記した。

(武田 正倫)

シラタエビ
Palaemon orientis

エビ目 (十脚目)
テナガエビ科

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
✻	▪	▪	▪	✻	

【形態・生態】
体長約 7cm(額角を含める)。額角は細長く、頭胸甲長の 1.5 倍ほどの長さがあり、前方の約 2/3 が斜め上方を向く。額角の上縁基部の盛り上がりは強く、その縁に 6、7 歯が並ぶ。下縁には 3 ～ 6 歯がある。尾節はくさび形で、背側縁に 2 対、末端部両側に 2 対のとげがある。第 1、2 脚は細長く、はさみを持つ。一般に透明感があり、頭胸甲、腹部ともに複雑な模様はない。内湾の汽水域に生息するが、浅海域でも見られる。

【分布の概要】
北海道 (南部)、本州、四国、九州

【都における生息環境】
東京湾に注ぐ河川の河口域周辺の汽水域に生息する。海水を好む傾向が強く、淡水域へ遡上することはない。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】
内湾の汽水域の指標となる種であるが、生息地は物理的な環境変化や水質汚染の影響を受けやすい環境である。

【関連文献】
三宅貞祥 , 1982.

(執筆者 : 武田正倫)

スジエビ
Palaemon paucidens

エビ目 (十脚目)
テナガエビ科

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
✻	✻	✻	✻	✻	

【形態・生態】
体長約 5cm(額角を含める)。額角は頭胸甲長の約 1/2 で、先端がやや上を向く。上縁に 5、6 歯、先端近くに 1 小歯、下縁に 2 歯がある。尾節の背側縁と末端近くの両側に各 2 対のとげがある。第 1、2 胸脚は小さなはさみを持ち、後方 3 対の胸脚は後方ほど長い。透明感のある体に明瞭な黒色縞模様があり、各胸脚の関節部は黄色い。河川、大型湖、池沼など多様な淡水環境に生息し、河口に近い汽水域でも見られる。

【分布の概要】
北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】
東京湾に注ぐ河川の下流域から中流域まで、止水環境から緩やかな流れの中まで幅広く見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】
良好な河川や池沼の指標となる種であるが、流域の水草の減少や水質汚染の影響を受ける。

【関連文献】
三宅貞祥 , 1982; 山崎浩二 , 2008.

(執筆者 : 武田正倫)

ユビナガスジエビ
Palaemon macrodactylus

エビ目 (十脚目)
テナガエビ科

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
✻	▪	▪	▪	✻	

【形態・生態】
体長約 4cm(額角を含める)。額角は水平に突出する。上縁に 10、11 歯があり、1、2 歯が眼窩後部より前方に位置する。下縁には 2 ～ 4 歯がある。胸脚の指節は近縁種に比較して長いことが本種の特徴である。頭胸甲には細い黒線模様があるが、腹甲には線模様はなく、濃褐色の小斑が一様に散りばめられている。全体に黒っぽい個体も見られる。内湾に注ぐ河川の汽水域から前浜干潟に生息する。

【分布の概要】
本州、四国、九州

【都における生息環境】
東京湾に注ぐ河川の下流域から海域にかけて、緩やかな流れのある場所に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】
良好な河口域の指標となる種であるが、生息地は水質汚染の影響を直接受ける環境である。

【関連文献】
久保伊津男 , 1942.

(執筆者 : 武田正倫)

テナガエビ
Macrobrachium nipponense

エビ目 (十脚目)
テナガエビ科

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
✻	▪	✻	✻	✻	

【形態・生態】
体長 8 ～ 10cm(額角を含める)。額角は真直ぐで、第 2 触角鱗片の先端に達する。上縁に 12、13 歯、下縁に 2 ～ 4 歯がある。尾節は第 6 腹節より長く、背側縁と末端縁に各 2 対のとげがある。第 2 胸脚は充分に成長したオスでは体長の 1.5 ～ 2 倍の長さになる。また、若い個体では指部と掌部は等長であるが、大型のオスでは掌部が指部の 1.3 倍になる。河川、湖沼に生息する。

【分布の概要】
本州、四国、九州

【都における生息環境】
東京湾に注ぐ大型河川の下流域から中流域まで、止水域から緩やかな流れの中まで幅広く見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】
良好な河川環境の指標となる種であるが、水質汚染の影響を受けるほか、摂餌活動が活発な初夏には釣りの対象とされるため、捕獲圧がかかる。

【関連文献】
三宅貞祥 , 1982; 山崎浩二 , 2008.

(執筆者 : 武田正倫)

ヌカエビ
Paratya improvisa

エビ目 (十脚目)
ヌマエビ科

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
✻	▪	✻	✻	✻	

【形態・生態】
体長 3 ～ 4cm(額角を含める)。額角は頭胸甲長の 4/5 ほどで、水平に突出する。額角上縁にある 6 ～ 20 歯は眼窩後部より前方に位置する。下縁には 0 ～ 5 歯がある。第 1、2 胸脚は小さなはさみを持ち、両指の先端に長毛の束がある。一般に透明感があるが、褐色がかった個体、緑色がかった個体、淡褐色の線模様を持つ個体など、変異に富む。緩やかな流れの中の水草や水中に露出した樹木の根の間などに生息する。

【分布の概要】
本州 (新潟と愛知を結ぶラインより北方に分布するとされる)

【都における生息環境】
東京湾に注ぐ河川の中流域に生息する。幼生は淡水中でも正常に成長し、流出河川のない池沼でも繁殖する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】
良好な河川や池沼の指標となる種であるが、生息地の水草の減少や水質汚染の影響を受ける。

【関連文献】
林健一 , 2007; 山崎浩二 , 2008.

(執筆者 : 武田正倫)

サワガニ
Geothelphusa dehaani

エビ目 (十脚目)
サワガニ科

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
✻	✻	✻	✻	✻	

【形態・生態】
甲幅約 3cm。甲の輪郭は丸みのある四角形で、後方がやや狭まる。甲面は滑らかで、甲域は不明瞭。眼窩外歯の後方で小さく切れ込む。オスのはさみ脚は大きく、左右で大きさが異なる。十分に成長したオスでは大きい方のはさみの両指は大きく湾曲し、隙間を残す。メスのはさみ脚は左右同大。体色は紫黒色、赤褐色、灰青色の 3 型。渓流に生息し、夏は水から離れて活動することが多い。

【分布の概要】
本州、四国、九州。北海道は人為的分布と考えられる。

【都における生息環境】
多摩地域の河川上流域から中流域に生息する。冬は渓流の大石の下で過ごす。皇居など区内の記録もあるが、自然分布であるかは不明である。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】
樹木が生育する清流の指標となるため、森林の管理が重要である。また、食用とされるため、捕獲圧がかかる。

【関連文献】
酒井恒 , 1976; 三宅貞祥 , 1983.

(執筆者 : 武田正倫)

ヤマトオサガニ
Macrophthalmus japonicus

エビ目 (十脚目)
オサガニ科

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
✻	▪	▪	▪	✻	

【形態・生態】
甲幅約 4cm。甲の輪郭は横長の四角形 (甲長と甲幅の比は約 1.5)。甲面は狭い溝で甲域に分けられ、小顆粒が散在する。眼窩は甲の前縁の全長を占め、細長い眼柄が収まる。甲の前側縁部に大きな切れ込みと小さな切れ込みがある。オスのはさみ脚は長大で、両指は掌部に対して直角に近く曲がる。メスのはさみ脚は細長い。中央 2 対の歩脚は太く、長い。河川の河口域の軟泥底に斜めに穴を掘り、干潮時にオスはメスに向かって両はさみ脚を振り上げて求愛する。

【分布の概要】
北海道、本州、四国、九州、南西諸島

【都における生息環境】
東京湾に注ぐ河川の河口域に生息する。流軸近く、あるいは開けた干潟の軟泥底に穴居する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】
河口域は水質汚染の影響を受けやすい環境であり、また、鳥類の餌として重要なため、捕食圧がかかる。

【関連文献】
酒井恒 , 1976; 三宅貞祥 , 1983.

(執筆者 : 武田正倫)

チゴガニ
Ilyoplax pusilla

エビ目 (十脚目)
コメツキガニ科

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
✻	▪	▪	▪	✻	

【形態・生態】
甲幅約 1cm。甲の輪郭はやや横長の四角形ないし六角形。甲面には短毛がまばらに生える。額縁は短く、その側部から細長い眼窩が斜め後方に走る。眼窩は背側に開き、細長い眼柄が収まる。左右のはさみ脚は同形同大で、雌雄とも掌部と指部が白い。オスは口部周辺が青緑色である。河口域の砂泥地に巣穴を掘って生活し、干潮時に長時間地表で活動する。摂餌後は口の部分で砂を丸め、巣穴周辺に置く。

【分布の概要】
東京湾以南から九州沿岸まで

【都における生息環境】
東京湾に流入する河川の河口域に生息する。淡水の影響を比較的強く受ける開けた砂泥地に穴居し、巣穴周辺を縄張りとして守る。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】
河口域の砂泥地は水質汚染や環境改変の影響を受けやすい。流軸の水量が減少し続けるとヨシが繁茂しすぎ、生息の場が失われる。

【関連文献】
酒井恒 , 1976; 三宅貞祥 , 1983.

(執筆者 : 武田正倫)

コメツキガニ
Scopimera globosa

エビ目 (十脚目)
コメツキガニ科

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
✻	▪	▪	▪	✻	

【形態・生態】
甲幅約 1cm。全体として球形に近いが、後方がやや幅広い。眼柄は比較的太く、左右の基部が接近している。眼窩外歯の後方に小さな 1 歯がある。左右のはさみ脚は同形同大で、指が細長くて先端が尖る。はさみ脚と歩脚の長節に楕円形の薄膜構造があり、聴覚に関与していると考えられている。大きな第 3 顎脚が口部を完全に閉ざしている。河口域の砂泥地に巣穴を掘って生息し、干潮時に地表に出て活動する。摂餌後の砂を丸めて巣穴周辺に置くが、巣穴周辺を縄張りとして守る行動は弱い。

【分布の概要】
北海道、本州、四国、九州、南西諸島

【都における生息環境】
東京湾沿岸の干潟、河口域のやや粗い砂泥底に穴居する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】
本種の生息は良好な砂泥地の指標となり得るが、沿岸と河口域の砂泥地は水質汚染や環境改変の影響を受けやすい。

【関連文献】
酒井恒 , 1976; 三宅貞祥 , 1983.

(執筆者 : 武田正倫)

アシハラガニ
Helice tridens

エビ目 (十脚目)
モクズガニ科

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
✻	▪	▪	▪	✻	

【形態・生態】
甲幅約 3cm。甲の輪郭は四角形で、背面は前後に弱く湾曲する。甲域は浅い溝で明瞭に分けられ、細かい毛で覆われる。甲の左右の側縁はほぼ平行で、眼窩の後方に 2 つの小さな、しかし明らかな切れ込みがある。オスのはさみ脚は左右とも大きく、同形同大。はさみ脚長節の末端部に稜があり、これで眼窩下縁に 1 列に並ぶ 16 ～ 18 個の顆粒をこすって発音する。河口のヨシ原を中心に生息する。

【分布の概要】
青森から九州までの日本海側・太平洋側両沿岸

【都における生息環境】
東京湾沿岸の河口から汽水域の上限まで生息する。河川の土手、主としてヨシ原に浅い穴を掘って生活する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】
河口域の自然植生の指標となる種であるが、生息地は水質汚染や土地改変の影響を受けやすい環境である。

【関連文献】
酒井恒 , 1976; 三宅貞祥 , 1983.

(執筆者 : 武田正倫)

モクズガニ
Eriocheir japonicus

エビ目 (十脚目)
モクズガニ科

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
✻	▪	✻	▪	✻	

【形態・生態】
甲幅約 5.5cm。甲の輪郭は丸みを帯びた四角形で、甲面は平たく、浅い溝で甲域に区分される。額縁は中央が浅くくぼみ、その左右が弱く突出するため、額縁全体が波打つ状態である。眼窩外歯の後方に 2 歯があるが切れ込みは小さい。はさみ脚掌部に軟毛の房があり、大型のオスでは特に著しい。河川の中流域に生息し、降海して半年ほどの間に 2、3 回、幼生を海に放つ。海で育った稚ガニが河川を遡上する。

【分布の概要】
北海道、本州、四国、九州、南西諸島

【都における生息環境】
東京湾沿岸に注ぐ大型河川の下流域から中流域に生息する。水から離れることはなく、土手などに穴居するほか、石の下に潜む。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】
河口域の水質汚染の影響を受けるほか、特定外来生物であるチュウゴクモクズガニ (シャンハイガニ) との競合が懸念される。

【関連文献】
酒井恒 , 1976; 三宅貞祥 , 1983.

(執筆者 : 武田正倫)

ケフサイソガニ
Hemigrapsus penicillatus

エビ目 (十脚目)
モクズガニ科

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
✻	▪	▪	▪	✻	

【形態・生態】
甲幅約 3cm。甲の輪郭は丸みのある四角形で、後方にやや狭まる。甲面は前後左右に弱く湾曲し、甲域は明瞭。眼窩外歯は三角形で、前方を向いて尖る。眼窩外歯の外縁は弱く湾曲する。その後方に 2 歯があるが、外縁はほぼ真直ぐである。オスのはさみ脚は大きく、両指の基部に軟毛の房があるが、メスや若い個体に毛はない。内湾の砂泥底や河口域に生息するが、純淡水域では見られない。

【分布の概要】
北海道、本州、四国、九州、南西諸島

【都における生息環境】
東京湾沿岸の淡水の影響を受ける泥地に生息する。特に河口域に多く、石の下などに潜む。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】
河口の軟泥地は水質汚染の影響を直接的に受ける環境である。

【関連文献】
酒井恒 , 1976; 三宅貞祥 , 1983.

(執筆者 : 武田正倫)

クロベンケイガニ
Chiromantes dehaani

エビ目 (十脚目)
ベンケイガニ科

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
✻	▪	▪	▪	✻	

【形態・生態】
甲幅約 3.5cm。甲の輪郭は四角形で、背面は前後に弱く湾曲する。甲域は深い溝で明瞭に分けられ、甲の側縁に近い鰓域上には平行な斜めの条線が多数ある。眼窩外歯は前方を向いて鋭く尖るが、甲の左右の側縁に切れ込みはない。はさみ脚は左右とも大きく、同形同大。各節は顆粒で密に覆われる。歩脚は太く長い。河口の水域周辺を中心に生息する。

【分布の概要】
秋田および岩手から九州までの日本海側・太平洋側両沿岸、南西諸島

【都における生息環境】
東京湾沿岸の河口域に生息する。都心に近い汚れた中流域まで河川を遡上する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】
水質汚染に強いことから " クロベンケイガニさえすめない " 極度な汚染の指標となる可能性がある。河川の水質汚染の影響を受ける。

【関連文献】
酒井恒 , 1976; 三宅貞祥 , 1983.

(執筆者 : 武田正倫)

ベンケイガニ
Sesarmops intermedius

エビ目 (十脚目)
ベンケイガニ科

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
✻	▪	▪	▪	✻	

【形態・生態】
甲幅約 4cm。甲の輪郭は四角形。甲域は明瞭に区分される。特に中胃域は縦に二分され、額縁の後方に横に並ぶ 4 個の隆起を形成する。眼窩外歯は大きく、前方を向いて尖る。眼窩外歯の後方に深い切れ込みがあり、その後方に大きな、しかし眼窩外歯よりやや小さい歯が形成される。オスのはさみ脚は大きく、掌部外面に平たい顆粒が集まる。河口域から周辺に分布を広げ、夏に幼生を放つために海辺に集まる。

【分布の概要】
秋田以南の日本海沿岸、東京湾以南の太平洋沿岸

【都における生息環境】
東京湾沿岸の河口域に生息するが、近年は湾奥に注ぐ河川周辺ではほとんど見られない。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】
河川と後背地である湿地の連続性を必要とする。河川と生息地となっている後背湿地が完全に切り離されたり、また、河口域周辺の湿地や自然植生が失われると生息できない。

【関連文献】
酒井恒 , 1976; 三宅貞祥 , 1983.

(執筆者 : 武田正倫)

カクベンケイガニ
Parasesarma pictum

エビ目 (十脚目)
ベンケイガニ科

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
✻	▪	▪	▪	✻	

【形態・生態】
甲幅約 2㎝。甲の輪郭はわずかに横長の四角形で、左右の側縁はほぼ平行である。各甲域は明瞭であるが、盛り上がることはない。眼窩外歯は三角形で、斜め前方に向いて尖るが、甲の側縁には切れ込みがない。オスのはさみ脚の掌部上縁に櫛歯状の角質突起が斜めに 3 列あり、また、可動指の上縁に 13 ～ 16 個の顆粒が並ぶ。河口域を中心に生息し、陸上へと進出している。

【分布の概要】
房総半島以南の太平洋沿岸、秋田以南の日本海沿岸

【都における生息環境】
東京湾沿岸の満潮線から河口域に生息するが、流れから離れて土手から陸上の草地へも進出する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】
生息地は水質汚染と土地改変の影響を受けやすく、また、陸上への進出のために河川周辺に草地を必要とする。

【関連文献】
酒井恒 , 1976; 三宅貞祥 , 1983.

(執筆者 : 武田正倫)

【種名・学名などの準拠文献】

和名、学名は三宅貞祥 , 1983. 原色日本大型甲殻類図鑑 . 保育社 . および、Ng, P.K.L., D. Guinot & P.J.F. Davie, 2008. Systema Brachyurorum: Part I. An Annotated Checklist of Extant Brachyuran Crabs of the World. *Raffles Bulletin of Zoology, Supplement*, (17): 1-286. に準拠した。また、配列は評価者の判断に従った。

【留意種とした理由】

和名	地域区分	留意種とした理由
シラタエビ	区部	下流域に生息する汽水性エビ類の代表種で、適度な塩分濃度のある環境の指標となるため。
	本土部	
スジエビ	区部	典型的な「中流域に生息するエビ」で、緩やかな流れに水草が育つ良好な河川の指標となるため。
	北多摩	
	南多摩	
	西多摩	
	本土部	
ユビナガスジエビ	区部	下流域に生息する淡水性エビ類の代表種で、その生息地は汚染の影響を受けるため。
	本土部	
テナガエビ	区部	緩やかな流れと水草のある河川のやや深みに生息する種で、下流域から中流域上部まで生息域が広い。大型種で注目度が高いことから、良好な河川環境の指標として利用しやすいため。
	南多摩	
	西多摩	
	本土部	
ヌカエビ	区部	中流域の止水環境に生息する種で、緩やかな流れと水草のある良好な河川の指標となるため。
	南多摩	
	西多摩	
	本土部	
サワガニ	区部	清流にすむカニであるが、低地では生息環境が失われた地域が多く、山間部では樹木の伐採、倒木の放置などにより良好な生息地が狭められつつあるため。
	北多摩	
	南多摩	
	西多摩	
	本土部	
ヤマトオサガニ	区部	河口の軟泥地に穴居し、干潮時に巣穴の外で活動する。鳥類の餌として重要であり、干潟の環境指標としても役立つため。
	本土部	
チゴガニ	区部	河口近くの泥まじりの砂地に穴居し、干潮時に活動する。きれいな干潟の象徴となるため。
	本土部	
コメツキガニ	区部	チゴガニよりも岸寄りに生息する。きれいな干潟の象徴となるため。
	本土部	
アシハラガニ	区部	河口域のヨシ原を主生息地とするカニで、河口域の自然植生の指標となるため。
	本土部	
モクズガニ	区部	河川の中流域で生活し、産卵のために降海する両側回遊種であり、稚ガニは海から遡上するために河口域の汚染の指標となる。また、生態的に競合する特定外来生物、チュウゴクモクズガニ (シャンハイガニ) の動向とともに個体数の増減に留意する必要があるため。
	南多摩	
	本土部	
ケフサイソガニ	区部	生息地はヤマトオサガニよりもやや岸寄りの軟泥地で、河川の汚染を直接受けることから、環境の指標となるため。鳥類の餌としても重要である。
	本土部	
クロベンケイガニ	区部	河川の流軸に沿って遡上し、水質の汚染にも比較的強い。過度の汚染の指標となるため。
	本土部	
ベンケイガニ	区部	下流域に生息し、流域の土手などに穴居するため、河川改修の影響を強く受け、環境指標となるため。
	本土部	
カクベンケイガニ	区部	流域から離れて、土手から陸上へと進出するが、草地のような生息環境を必要とするため。
	本土部	

【関連文献】

林健一 , 2007. 日本産エビ類の分類と生態 II コエビ下目 (1). 生物研究社 . 292 pp.
久保伊津男 , 1942. 本邦産手長蝦類ノ研究 III 小手長蝦属 (*Leander*). 水産講習所研究報告 , 35(1): 25-36.
三宅貞祥 , 1982. 原色日本大型甲殻類図鑑 (I). 保育社 . 261 pp.
三宅貞祥 , 1983. 原色日本大型甲殻類図鑑 (II). 保育社 . 277 pp.
酒井恒 , 1976. 日本産蟹類 . 講談社 . xxix+773pp.(英文), 461 pp.(和文), 16 pp. + 251 pls.
山崎浩二 , 2008. 淡水産エビ・カニハンドブック . 文一総合出版 . 64 pp.